

情緒障害児 A児を受け入れて ～統合保育の記録～

南 佑子 高木 真美
片岡 直子 恩田 保子
李 徳英

Report of a Handicapped Child

Yuko MINAMI, Mami TAKAGI, Naoko KATAOKA,
Yasuko ONDA, Tokuei RI

1. はじめに

本園はこれまで情緒面での配慮を必要とする子どもを受け入れた経験がなく、平成13年度に情緒障害児A児を受け入れ、初めて園全体で統合保育に携わることになった。私立園では配慮を要する子ども達を受け入れるか否かは、それぞれの園の判断に委ねられている。行政からの援助や補助は、入園確定後、秋頃に決定となり実質的な援助は次年度の初めとなる。施設の整備、人の配置等、入園前に準備が必要なことが多くあるのだが、決定を待たなければとりかかれないという実情がある。その時々で最善だと思われる方法を模索しながら取り組んできた1年間におけるA児の成長と、友達や教師とのかかわりをまとめてみた。

2. 入園前の状況

入園前の1年間、本園が地域に幼稚園を開放して行っている子育てセミナーに、A児は3歳7ヶ月の時から親子で参加していたが、母親と離れる

のを泣いて嫌がるが多かった。他児のいない保育室で教師と1対1でかかると泣かずに過ごすことができていたが、知っている単語で応答するだけのことが多く、「何がしたいの?」というような気持ちを問いかける言葉に対しては返事がはっきりしない時もあった。

入園前の面接の際は、名前や誰と一緒に来たのか等ははっきり答えることができたが、母親にしがみついている状態だった。しかし、入園前面接では緊張したり恥ずかしがったり、時には泣き出したりする子どももいるので、A児に特に配慮を要するような面があるようには見受けられなかった。

入園決定後の2月に母親から、「児童相談所でLD児の手前であるという判定を受けた」という話があった。多動で言葉がはっきりしない為、児童相談所に相談に行き、判定が出た後、月2回の音楽療法を始めたということだった。

入園までの日数がなく、全てが手探りの状態でA児へのかかわりが始まった。

3. 入園当初の姿

2年保育児として4月に入園したA児は全く落ち着きがなく、保育室や園庭を走ったり跳んだりしながら目まぐるしく動き回っている。他児に対してはぶつかっていたり、肩を組み自分の体に引き寄せたりするので結果的に相手の首を絞めるような状態になったりする。また、友達をつくっていたものを取り上げ持って行ってしまうので、トラブルが続出し目が離せない。しかし、クラスには他にも配慮を必要とする子どももおり、A児にはばかりかかわってられない状況であった。

A児の乱暴な行動から、クラスの友達や保護者から不満が出たためA児の保護者と話し合い、他児の保護者にA児の現状を伝えて理解を求めた。またクラスの子供達にはA児の現状を分かるように説明し、決して皆のことが嫌いな訳ではないということを伝えた。4歳児では、言葉だけで理解するのはまだ難しかったため、日常生活の中でA児の良い面を伝えたりかかわる機会をもったりしながら、A児を受け入れていける気持ちが芽生えるように配慮していった。

言葉は知っている言葉を単語で話したり、オウム返しをしたりすることが多かった。

4. 保育実践の中で

〈悲しい気持ちをどうしよう?〉

自分の感情をいつもストレートに出しているA児であったが、それでも時折激しく感情を爆発させることがあった。それは友達を叩いて「いけない」と言われた時や自分の願いが叶えられなかった時にしばしば見られた。初めは「いや」「して」と泣いているのだが、次第にパニック状態になり、暴れたり泣き叫んだりする。担任が抱きしめたり穏やかに話しかけたりすると落ち着きを見せ始めるが、なかなか気持ちを立て直すきっかけが見つけられず一日ぐずっていることもあった。

1学期の中頃、A児は園で飼育している大好き

なウサギの親子を触りたくなり、飼育小屋を力任せに倒したことがあった。その頃A児は、生まれたての子ウサギを見たさに小屋に入ることが頻繁で、子ウサギを連れ出しそのまま興味がそれると外に放り出してくることもあった。何度も「子ウサギは見るだけにしようね」と言い聞かせても効果がなかったため、飼育小屋に鍵をつけた。すると小屋を激しく揺すったり「開けて!」と怒ったりし、ついに我慢ができなくなり小屋を倒したようだ。それを担任が「いけない」と語気を荒げて制止した。このように強くA児の行動を制止したのは園生活が始まって以来、初めての出来事だった。A児は泣き叫びながら両手を握り締め、拳骨で自分の頭を何度も繰り返し叩き、やめさせようと担任が手をもつと、担任にしがみついて泣き始めた。それまで担任がA児に対して「いけない」と言っても、聞く耳をもっていないのではないかと感じたことも度々あったが、このA児の様子には胸を絞めつけられるような思いがした。そして、「いけない」と言われるとA児なりに止めようとしているのではないかと感じるようになった。止めようとしても、自分の衝動を自分でコントロールするのが難しいA児の現状を目の当たりにして、感情的に制止した自分の行動を反省し、改めてA児の心に寄り添っていく大切さと難しさを感じた。

〈いっしょに遊ぼうよ〉

入園当初、A児は同じクラスにいる子ども達にほとんど興味を示さず、自分が行きたい所に行き、したいことをして過ごしていた。友達に対しても、自分の感情のおもむくまま叩いたり、押したり、友達の使っている物を取り上げたりという行動が続いていた。しかし5月中旬頃から、歌をいっしょに歌ったり友達のしている遊びを見たり等、少しかわりかかってくるようになってきた。A児は環境の変化や人の心の動きに非常に敏感な面があり、他児がA児のことを認めたり受け入れたりし始めると、少しずつA児も友達の存在を意識し受容す

るようになっていった。友達の行動を見て真似ようとしたり、集団での活動に1～2分と短い時間であっても気が向けば参加したりするようになった。友達の存在は気になり大いに刺激を受けているようなのだが、一方で、「お友達は嫌い！」と言ったり、みんなでしている遊びが盛り上がってくると「うるさ～い！」と怒鳴り、遊びを壊しにきたりすることも度々であった。自分の衝動的な思いや行動を相手にぶつけるばかりでなく、相手の思いにも気付いていけるようにと、してはいけないことは「いけない」と伝え、その都度「されたお友達は困っているよ」「悲しいよ」と決してA児を突き放さないようにしながら伝えるようにした。初めは全く聞こうとしなかったが3学期頃になると、「Bちゃん、なんで泣いてるん？」と友達のことを気にしたり、遊びにかかわった後「楽しいなあ」と言ったりするようになってきた。A児なりに「友達」とかかわる楽しさが感じられるようになってくると、友達に対して乱暴なことをする場面が少なくなってきた。友達はA児にとって、まだまだ必要不可欠な存在ではないが、「自分からかかわってみようかな？」「一緒にしてみたいな」と思うことができるようになったことは大きな変化だと感じていた。

〈ボランティアの先生との出会い〉

園生活に慣れるに従って、A児の行動範囲は広がり園内を走り回って遊ぶようになり、藤棚や高い木に登ったりほうきや竹馬を振り回したり等、行動もダイナミックになっていった。クラスには他にも配慮を要する子どもがおり、A児に十分かかわってやれない。放っておけばA児や他の子どもも怪我をする心配があったため、加配教員の必要性を感じ人探しを始めた。しかし、なかなか適当な人がなく行政からの財政的な補助も未定だった為、有償ボランティアの方達に手伝ってもらうことになった。当短大の心理学担当の先生に相談しいろいろ手を尽くして頂いた結果、心理学を専

攻している大学院生が手伝ってくれることになった。当初1名の予定であったが、大学院生の授業の関係で3名の人にかかわってもらうことになり、本園の預かり保育担当教員1名を加えローテーションを組んで取り組む事になった。1人の教員がA児に継続的にかかわることが理想的であると十分承知していたが、この時の状況下で考えられた精一杯の策であった。

2学期初めから加配教員を配置しての取り組みが始まったが、それまで比較的自由に過ごせていたA児にとって、ずっと人がついてくる、見られているというのはとても苦痛に感じられたようだ。また、新しい環境を受け入れることも苦手だったため、拒否的な態度が続いた。反抗期とも重なり、ボランティアの先生達にも「あっち行っとって」「大嫌い」と悪態をつくようになった。そこでボランティアの先生には、友達に乱暴をしたりA児に危険が伴ったりしない限りはA児の行動を見守ってもらうように依頼した。

ボランティアの先生がついたことで反抗期をより助長させているのでは…と心配になった事もあったが、「いろいろな人とかかわることは、A児の育ちにプラスになる」と通級教室の先生から励ましていただき、担任がA児の心理面をしっかりサポートするよう心がけながら様子を見守った。日が経つにつれA児の気持ちにも変化が見られ、ボランティアの先生の中に大好きだと思える先生ができたことから、来てくれるのを楽しみに待つようになった。ただ、ボランティアの先生は遊んでくれる人、身近にいてくれる人と感じてはいるようなものの、嫌なことがあったり泣いたりした時は担任の所に走ってくるが多かった。

ボランティアの先生の存在に戸惑い、一旦は拒否反応を示したA児だったが、他児とのコミュニケーションをとる手助けをしてもらったり、いっしょに遊んだりする中でかかわりを深めることができた。決して自信をもって始めた加配教員の配置ではなかったが、それぞれの先生の人柄に触れ、

A児なりに信頼感をもち始めた様子を見て、A児の育ちにプラスになった出会いだったと感じていた。

〈先生、嫌い〉

夏休みが終わり9月に登園してくると、A児はあらゆることに反抗的な態度を見せるようになっていた。園の実情から3人のボランティアの先生が毎日交代で共に過ごすようになったことや、母親の妊娠により今までのようなかわりができなくなったことが重なり、環境の変化に敏感なA児はますます反抗的な態度を強めていったようだ。

大好きだった父親のことも「怒るから嫌い」と言い、担任の言うことにも耳を貸さず、A児の口から出てくる言葉は「嫌い!」「あっち行って!」「見ないで!」ばかりになる。友達に対しても、「Aちゃん」と言われても睨みつけ「フンッ」と言ったり、気に入らないことがあると全く関係がなくても傍にいる子を押ししたりと、刺々しい態度で接するようになった。

家庭でも園でも対応に苦慮する毎日であった。教師間でも「何かかわり方に問題があるのだろうか?」「どのようにすれば態度に変化が見られるのか?」と話し合ったり、A児が通っている通級教室の先生に相談したりした。その中で、通級教室の先生から「Aちゃんに反抗期がでたのは、良い事ですね。Aちゃんの成長と捉えたらいいのではないですか。」という指導をいただいた。私は困った事ばかりに目を向けていたが、年齢から考える発達段階よりも少し遅れがちであったA児に反抗期がきたということは、A児なりの発達が見られるようになった証拠だと考えることができるようになった。それならばゆったりと、A児の反抗期とそれを乗り越えていく様子を見守ろうと全職員で取り組みを始めた。

11月に入ると両親や、担任に対する態度が以前のように穏やかになり、少しずつ周囲の人ともかわりがもてるようになってきた。反抗期が過ぎ

ると担任との信頼関係も安定し始め、自分からかわりを求めるようになっていたり、して欲しい事も素直に伝えたりできるようになった。A児の成長を見守る中で、困った面をマイナスにばかり受け止めず、A児の良い面に目を向けたり、成長の段階を多面的に捉えたりすることの大切さを痛切に感じた。

〈話したいこと〉

入園直後は、知っている単語を話したりオウム返しをしたりして会話が成立しにくいA児だったが、日に日に語彙数が増え言葉がはっきりと話せるようになった。友達の名前がわかるようになると「～ちゃん～してるなあ」と言ったり、アニメの主人公の言葉をそのまま真似て遊んだりするようになった。担任に「～って言って」とセリフを言うことを要求したり、「私は～なのよ」と相手の問いには関係のない答えを返したりすることもあった。A児自身の発達や周囲からの刺激で2学期中旬頃には、その場に合った話ができることも増えてきた。また動物の図鑑を見ながら「象だぞーう」というような、言葉遊びを楽しむ姿も見られるようになってきた。友達がお腹が痛いと言うと、「私は医者です」「薬をどうぞ。1,800円です」等、一方的な会話になる時もあるが言葉のやりとりができるようになってきた。3学期になると「ありがとう」「貸してね」という生活の中で必要な言葉が、必要な場面に出てくるようになった。物事を伝えたり、感情を表したりするのはまだ難しいようだったが、戸外に出たときに「先生、風がおいしいねー」というような情緒的な言葉が出ることもあった。人とのつながりが深まるのに伴って、言葉の面も伸びていったように思う。

〈いっしょにするよ〉

自分のしたいことや思いが優先し、集団で遊ぶ遊びや活動にはあまり関心をもつことがなく、クラス子ども達とは全く別行動をとることが多かつ

た。特に表現遊びやゲーム遊び等、流れやルールがある遊びにはほとんど参加しなかった。ところが2学期後半になり、友達とのかかわりが少しもてるようになってくると、「みんなは何してるの？」と聞いたり、友達のする集団遊びをじっと見たりするようになってきた。

A児は絵本やお話が好きである。クラスの子ども達と「てぶくろ」のお話に沿ってごっこ遊びをした時、自分から短時間ではあったが参加した。「私はおしゃれぎつねよ」「ぴょんぴょんガエルはどこにいるの？」と出て来る場面は違っても、話の筋は理解して劇ごっこに参加してきた。A児の参加を喜んだ他児が話を合わせると、「あなたはだーれ？」と嬉しそうに返事をする姿が見られた。3学期になると、他児の行動を見ながらA児も参加しようとする事が多くなってきた。2月の生活発表会では練習にはほとんど参加しなかったが、練習の場である遊戯室にはついてきていた。生活発表会当日は参加することを嫌がったので、「みんなのこと応援してて」と言うのと、「やっぱりする」「みんなと行く」と全プログラムに参加した。劇遊びの中では参加したい場面になると嬉しそうに出るが、出たくなると小道具の後ろから顔を出し友達のしていることをじっと見ていたり、友達に「こっちょ」と話しかけたりしていた。A児なりの参加の仕方ではあったが、できるだけそれを受け止め認めるように心がけた。

教師や友達との関係が安定すると共に、A児の中に「いっしょにしたい」「いっしょに行きたい」という思いが育ち始めたように思う。そして1年間の園生活の経験を通して物事を理解したり、「～したら～するの？」とその前後のことに見通しをもったり、期待をもったりするようになった。また、A児は人とのかかわりや経験を通して、全く興味のなかった集団での遊びや活動に興味をもち、自分からかかわってみようという思いがもてるようになっていった。しかし、状況を理解してその場に合った行動をとったり、物事を伝えた

りするのはまだ難しく、今後の園生活の中でA児が体得していかなければならない課題だと思う。

5. おわりに

A児を受け入れた当初、「A児に対してどう指導すべきなのか?」「できることは何なのか?」と常に考え、その考えに捉われ続けていた。そしてそれが私たちとA児とのかかわりの大きな壁となっていたような気がする。しかし、A児とのかかわりが深まると共に、A児の全てを受け入れ、良い面を十分に認めながら育ちを見守る、サポートをすることが大切なことなのだ気づくことができた。今、振り返ってみると、私たちの気持ちが変わったことがA児との良いかかわりにつながったのではないかと思っている。クラスの子ども達もA児と共に生活することで、当初感じていた大きな抵抗を乗り越え、特別な存在としてではなくA児を自然に受け入れ接することができるようになった。子ども達の中に自然な優しさが育ったのは、A児の存在があったからこそだと思う。また、A児の反抗期への対処や日常生活の中で対応に困る出来事があった時、専門機関の先生方よりの確に指導・助言を受けることができ、連携の大切さを痛感した。

A児は、4月から年長組に進級した。昨年度の実績から行政の補助も決定し、加配教員1名を固定して配置することができた。徐々に新しい加配教員との信頼関係を深め、落ち着いた状態で園生活を過ごすA児の姿が見受けられる。クラスの友達も昨年と変わりがなく、安定した気持ちでA児なりに遊びに加わったり話をしたりしながら、かかわりを深める姿も見られる。1年間の園生活での経験を土台として、様々な経験をしたり人とのかかわりをもったりしながら、充実した園生活を送れるようこれからも園全体で見守っていきたいと思う。

付 記

A児のご両親には、A児の1年間の記録をまとめて発表することについてご快諾いただき、感謝申し上げます。また、神戸生田教室の先生方、神戸常盤短期大学幼児教育科の先生方、ボランティアの方々には、私たちの実践を多面的に支援していただき、心よりお礼を申し上げます。

本当に有難うございました。